

子どもの“いい顔”を見つけよう!

今日はAちゃんが“いい顔”しています!」「お風呂に入って、呼吸が楽になったのかな?」「学校でたくさん抱っこをしてもらって嬉しかったのかな?」

日勤看護師から夜勤看護師への申し送りの際、こんなやりとりがありました。Aちゃんは表情での感情の読み取りが難しく、呼吸状態が不安定な重症心身障害のある女の子でした。

病棟ラウンド中であった私は、この申し送りの場面に運よく遭遇し、「“いい顔”をしているっていうことは、今日は排痰がうまくできたのかな?」と思いました。そして、私もAちゃんのいい顔を見たいと思い、ベッドサイドに向かいました。Aちゃんはピンク色の唇で、両頬には適度にふんわりと張りとも赤みがあり、呼吸もスムーズであり、“いい顔”をしていました。看護師たちは申し送り後も数人で集まり、Aちゃんの“いい顔”の背景や要因を探していました。それはとても楽しそうに見え、まるで宝探しをしているような楽しさを看護師たちが感じているようにも思いました。

このエピソードから、「“いい顔”って何だろう。看護師は、どのようなときに、何を基準として、“いい顔”をとらえているのだろうか?」と考えました。そして、子どもの“いい顔”をもっと見つけることができ、それを子どもにかかわる人たちで共有できたら、子どもの見方がもっと広がり、かかわり方やケアが深まるかもしれないと

思いました。その日から“子どものいい顔”探しの旅が始まりました。看護師や保育士、理学療法士や医師などの職員、そして家族がどのようなときに“いい顔”と話しているのかを注意深く観察しました。すると、子どもにケアをしているとき、家族と子どものことを話しているとき、申し送りやカンファレンス、休憩室やロッカーでの雑談のときなど、多くの場面で、子どもの“いい顔”につい



て語り合っていることがわかりました。さらに、その判断やとらえ方は、人によって少しずつ異なっていることもわかりました。しかし、異なっているから間違いということでは決してなく、それぞれがとらえた子どもの様子を互いに伝え合うことで、子どもを看る視点の新たな発見につながっていました。

子どもにかかわる看護師は、主に医療機関や療育施設、地域では訪問看護や教育機関などで、病気や障害がある子どものケアを行っています。病気や障害がある子どもは苦痛やつらさ、

不自由さを抱えながら生活していることが多いです。看護師は、子どもの苦痛やつらさを一刻でも早く取り去ることを看護目標にあげます。そして、子どもの苦痛やつらさのサインをいち早く読み取り、苦痛の出現を予測して予防するための看護を行います。では、子どもが安楽であったり、快であったりする状態、つまり“いい顔”をしているサインをどのように読み取り、予測し、ケアにつなげているのでしょうか。きっと、読者の皆さんにも、子どもの“いい顔”をとらえた瞬間があるのではないかと思います。皆さんはどのようなときに、「この子は“いい顔”している」と思われますか？



本 特集の「子どもの“いい顔”」は、楽しいイベントを体験することによってみられることもあれば、日々の心地よいケアからみられることもあります。子どもの“いい顔”を看る(見る)ことが、看護師自身や子どもにかかわっている多職種や家族の“いい顔”につながっていく場面も多く見てきました。しかし、子どもが“いい顔”をしている様子や状況は、その背景や要因が明確ではないこともあり、子どもを看る(見る)人によってとらえ方が若干異なる場合もあるため、“いい顔”をとらえるに至った判断の根拠を詳細に記録したり、言い伝えたりすることが難しいのではないかと考え

ました。したがって本特集で、多角的な視点から子どもの“いい顔”を看る(見る)ために、どのようなかわり方や工夫があるのかを紹介することにしました。

ま た、本特集テーマを企画するにあたり、筆者を“いい顔”にしてくれた子どもとその家族にも執筆をお願いしました。イラストレーターとして活躍中の秋山さんとは、秋山さんが小学2年生、筆者が大学生のときに出会いました。秋山さんは人工呼吸器を装着して地域の通常学校に通っており、筆者は通学ボランティアをしていました。

小網さんと吉田さんには、筆者が以前勤務していた施設の在宅支援病棟で出会い、ケアをさせていただきました。小網さんと吉田さんのお子さんは、筆者や病棟職員に何度も“いい顔”を見せてくれて、その喜びを病棟全体で共有したことを今でも覚えています。

本特集では、さまざまな立場で子どもたちにかかわっているスペシャリストの方々に執筆いただき、“子どものいい顔”の見方や、子どもと私たちが共に“いい顔”になるための活動や考え方などのエピソードを集めていただきました。病気や障害があるがゆえに自分のことを他者に伝えることが難しい子どもたちの“いい顔”を看ることは、その子どもの想いや希望を見つけることの一助になると考えています。そして、読者の皆さんが、本特集のなかで子どもたちと子どもたちにかかわっている人たちの“いい顔”にたくさんふれることで、明日からの元気の源になれば幸いです。

仁宮真紀 Ninomiya Maki

日本赤十字看護大学大学院博士後期課程 / 小児看護専門看護師

レイアウトデザイン mio